

# 音楽科鑑賞の授業における子どものイメージの変容過程

## —《山の魔王の宮殿にて》を教材とした授業実践を通して—

学籍番号 199347

氏名 待田 理恵

主指導教員 田中 龍三

### 1. 研究の背景と目的

筆者は以前から「子どもが主体的に音楽の授業に取り組むにはどうすればいいのだろうか」という問題意識をもっており、とりわけ鑑賞の授業においてその思いが強かった。そのような中、教職大学院で音楽科の授業理論を学んだことで、子どものイメージを大切にする授業を行うことが鍵となるのではないかと考えた。そして、音楽科における子どものイメージについて調べる中で、「子どもが形成したイメージは、音と相互作用することでつくり変えられていく」ということが分かり、これについて興味をもった。では、子どものイメージはどのような過程を経てつくり変えられていくのだろうか。自身が特に鑑賞の授業において問題意識を強くもっていたことから、中学校の鑑賞の授業において、子どものイメージがどのようにつくり変えられていくのかについて調べたが、そのような先行研究は見当たらなかった。

これらのことから、本研究の目的を「音楽科鑑賞の授業における子どものイメージの変容過程」とし、研究を行うこととした。

### 2. 研究の方法と授業分析の概要

研究を行うにあたり、まず、音楽科における「イメージの変容」について先行研究を調べたところ、小学校音楽づくりにおける先行研究があった。そこから「イメージの変容」とは、「はじめの漠然としたイメージが、次第に明瞭で鮮明なイメージへと作り変えられること」ということが分かり、本研究でもこの規定を用いることとした。

次に、自身が実習校で実践した鑑賞の授業について分析を行った。鑑賞の授業については、中学校第1学年を対象に全3時間で行った。指導内容を「2つの旋律の反復と変化」に設定し、教材は《山の魔王の宮殿にて》を扱った。授業分析の視点として、「イメージの変容」の規定をもとに、(a)子どもは音楽からどのようなイメージを形成したか、(b)子どもが形成したイメージはどのように変容したか、(c)子どものイメージが変容した要因は何か、の3点を設定した。そして、今回の授業の中でイメージについての発言や記述が多く見られた桃谷・福島・大木(全て仮名)の3人の生徒を抽出して分析を行うこととした。

子どものイメージの変容を見るために、まず、子どもが最初にどのようなイメージを形成したのかについて捉えておく必要がある。今回の授業で抽出生徒が最初のイメージを形成したと考えられる場面は、授業の冒頭に曲の「はじめ」の部分の聴いた時であった。ここでは、曲に対する漠然とした大まかなイメージが形成されたと考えられる。

次に、抽出生徒のイメージが変容していると考えられる場面を3つ設定し、それぞれの生徒のイメージがどのように変容しているのかについて分析した。

【学習場面1】では、生徒は曲の「はじめ」「途中」「終わり」の3つの部分に対して、それぞれのイメージを形成した。しかし、生徒が形成した最初のイメージは曲の「はじめ」の部分に対するイメージであったため、ここでイメージの変容が見られたのは、曲の「はじめ」の部分に対するイメージのみであった。この学習場面では、桃谷は、最初のイメージに内包しているイメージを付け加えたことで詳細なイメージを形成し、イメージを変容させた。福島と大木については、この曲がつけられている劇の物語に対象を絞ったイメージを形成したことで詳細なイメージを形成し、イメージを変容させた。ここで子どものイメージが変容した要因として、「音楽の要素を新たに捉えたこと」「曲名や曲の情報を知り、それを基に音楽を聴いたこと」が挙げられる。

【学習場面2】では、再度曲を聴いて、曲の3つの部分のうち、生徒がイメージを付け足した部分において新たなイメージを形成した。福島と大木については、ここでイメージを付け足したことから新たなイメージを形成していたが、桃谷はイメージを付け足さなかったため、新たなイメージは形成されなかった。福島と大木は、【学習場面1】で形成したイメージに、曲がつけられている劇の主人公ペールの心情や行動を表したイメージをさらに付け加え、【学習場面1】よりさらに詳細なイメージを形成し、イメージを変容させた。そして、大木については【学習場面1】で形成したイメージに、全く新たな内容を付け加えたイメージも形成して、イメージを変容させた。ここで子どものイメージが変容した要因として、「他の生徒が形成したイメージに共感したこと」「曲がつけられている劇場面の詳細な物語を聞いたこと」「音楽の要素を新たに捉えたこと」が挙げられる。

【学習場面3】では、生徒は曲全体を通してじっくりと聴き、曲全体に対してイメージを形成した。抽出生徒3人共に、【学習場面3】までは曲の各部分に対してそれぞれ詳細なイメージを形成していたが、ここでは曲全体を一つにまとめたイメージを形成し、イメージを変容させた。ここで子どものイメージが変容した要因として、「曲全体を通して聴く中で、時間の経過を意識して捉えるようになったこと」が挙げられる。

### 3. 結論と考察

授業実践についての分析より、音楽科鑑賞の授業における子どものイメージは「はじめは漠然とした大まかなイメージだが、その後より詳細なイメージに変容し、最後には曲全体を一つにまとめたイメージへと変容する」ということが分かった。そして、イメージが変容する要因としては、「曲についての情報を知ること」「他の生徒が形成したイメージに共感すること」「音楽の要素を新たに捉えること」「時間の経過を意識して捉えるようになること」が考えられる。

今回鑑賞の授業における子どものイメージの変容過程について分析する中で、鑑賞の授業においても、子どものイメージが変容するたびにイメージがより詳細になっていき、それによって表現の内容も具体的になっていくことが分かった。今回の授業分析から、子どものイメージが変容する要因についても知る事ができた。これを基にして、今後自身が行う授業において、子どものイメージが変容する場を積極的に設定していくことに役立てていきたい。

今回の授業分析では、授業記録が十分ではなかったため、推察による内容も多くなってしまった。今後、授業記録をしっかりと取った上で、もう一度これについて研究を行いたいと考えている。